F 班３グル―プ「御神輿」
テーマ：「社会で生き抜く力」の育成

大学の役割

大学は「学生」「国」「社会」「地域」「企業」「高校」「保護者（保証人）」のように社会を形成する多くの組織や人と関係をもつ。その中で、例えば「学生」からは「人材育成」「学生生活支援」等の役割を求められ、「社会」や「企業」からは、「基礎研究」「人材輩出」等の役割が求められている。このように、各関連組織から大学が共通で求められていることを纏めると、「社会基盤（人材・学問）の整備」が最大の役割ではないかと考えられる。

現状

「人材育成」という観点では、現在の大学では「就職」が目的化されてしまい、就職後のコミュニケーション能力の不足、離職率の増加にも見られるように、「社会で生き抜く力」の育成が足りていないのではないだろうか。

テーマ選定理由

チームの話し合いで大学に関連する組織が大学に求める役割について挙げていく中で「企業の求める能力」「自分で判断する力」「企画立案する力」といった力の育成が多く挙げられた。これらをまとめ、就職後も社会や企業の発展に貢献し活躍していく「社会で生き抜く力の育成」とした。

問題点の深堀

「社会で生き抜く力」とは具体的に何かについて考え、「自律・自立心」「ストレス対応力」の２点に分けて深堀を行った。

（１）「自律・自立心」

現状

本来学生自身がすべきである相談や行事への申込みを保護者が行うことが多くなり、大学側も１８歳人口の減少に伴う学生確保のため、保護者からの要望を受け入れることが多くなり、学生管理や保護者向けの説明会実施等が増えてきている。保護者からの過保護と、大学の管理・支援制度の充実・多様化で、ある程度卒業までのレールが敷かれてしまうため、そのレールを歩いていれば卒業・就職できるようになってしまっている。そのため、社会に出てから自分で考え、判断する必要性が出た時に、その力がなく社会で生き抜くことができなくなってきている。

解決策の検討

今後の大学に求められるサポートは卒業・就職のサポートではなく、成長するためのサポートであるべきと考えられる（ただし、卒業・就職のサポートがゼロで良いというわけではない）。

① サポート体制の見直しと保護者や学生への大学の方針の周知

大学は保護者から求められる要望全てを受け入れるのではなく、大学としてどのような人材を社会に送り出したいのかを再検討し、サポート体制を見直すことが必要だと考える。

そして、保護者や学生へ、大学のサポートはどのようなものかをきちんと伝え、認識に相違がないようにすることが必要である。

② 学生が社会に目を向けて事業を体験する機会の提供

学生は就職活動を始めるタイミングで社会に目を向け始める傾向が強いため、自分は社会で何をしたいのか、何ができるのかを考えずにとりあえず就職をしてしまうというケースが増えていると考えられる。学生がより早いタイミングで社会に目を向けるために、大学から学生に社会に目を向けられる機会（インターンシップや地域との交流イベントなど）の提供が必要である。

（２）ストレス対応力

現状

離職理由の上位を占める理由に、「思っていた仕事ではなかった」、「職場の人間関係」がある。 学生時代は自分と好みや思考が合う人とのみの交流が主流となり、ストレスを最初から回避できる環境にいるため「自分や他人のストレスポイントを知らない」、「社会でのストレスを知らない」状態で社会に出てしまい、離職率を増加させている。

解決策の検討

今後の大学に求められるサポートは、就職支援だけではなく社会に出てからの「ストレス対応力」を身につけさせることである。

① 講義や就職ガイダンス等での自分と他人のストレスポイントのチェック

自己分析を通して自己を理解し、ガイダンス等で他人の価値観を理解し、相互理解を深めていく。

②就職ガイダンス等を通じて、OB・OG から社会でのストレス経験を聞く

業界問わずストレス経験を聞くことで就職後のイメージを少しでも形成することができ、自分が思い描いていた業務が出来ないときの忍耐力を培うことができる。

③ 最低限の法律・心理学の知識の修得

雇用形態も多様化し、職場には「バブル世代」「氷河期世代」「ゆとり世代」（もう少しすると「さとり世代」が加入）と１０代後半から６０代と世代間の広がりは大きく、物事に関する考え方も複雑化してきている。「セクシュアルハラスメント」「モラルハラスメント」「パワーハラスメント」等、捉え方は様々であるため、講義、ガイダンス等で、職場で起きる事例をもとに最低限の法律知識や心理学を修得しておくことは、自分を守るだけではなく相手を傷つけないためにも重要である。

まとめ

大学は学問を教授する場から社会に出るサポートをする場へ役割が多様化しており、学生や保護者の求める“就職”をさせることが目的化している。しかし、サポートの充実により学生自身の成長する機会が減り、就職後の環境に対応できない卒業生も多く、３年以内離職率も低下しないままである。それを踏まえ、今後は就職後も社会で生き抜く力、さらには人生を幸せに生きるための力を育成するべく、サポートの見直しが必要である。